



TITLE:

3-5 学部学生として過ごした日々
(3. 思い出に残る京大の講義・演習
・実験・論文指導等)

AUTHOR(S):

市川, 洋

CITATION:

市川, 洋. 3-5 学部学生として過ごした日々 (3. 思い出に残る京大の講義・演習・実験・論文指導等). 京大地球物理学研究の百年(III) 2011, 3: 118-119

ISSUE DATE:

2011-10-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169922>

RIGHT:

学部学生として過ごした日々

市川洋 (1972 年卒)

1968 年 4 月に理学部へ入学した私は、博士課程を修了した 1 年後の 1979 年 8 月に鹿児島大学に職を得て京都を離れるまでの 11 年間で京都大学で過ごした。この間に会った個性豊かな教官・先輩・友人たちとの交流の経験があったればこそ、その後の研究活動において、国内外の多くの協力者の支援を必要とする海洋観測研究を円滑に続けることが出来たように思う。

以下では、かなり不確かな記憶をたどって、1970・71 年度に地球物理学教室で学部学生として過ごした日々を紹介する。この小文を通して、当時の地球物理学教室の「おおらか」な雰囲気的一端が伝わり、今後の地球物理学教室の発展の参考になれば幸いである。

時代背景

私を含む 1968 年 4 月に理学部に入学した学生達は、激しい大学紛争の日々を経て、1970 年 4 月から学部へ進学した。とはいうものの、大学紛争後の改革により学生の教室分属制度が廃止されたため、地球物理学教室に所属したわけではなかった。卒業論文に類似する科目として「課題研究」が設定されていた。しかし、全必修科目の廃止とともに、この「課題研究」も必修ではなかった。単位修得科目の内容を問わず、卒業に必要な数の単位を修得すれば卒業できることになった。このように学生の自主性が十分すぎるほどに尊重された制度であったためか、教養部の仲間の中には、逆に自分の専攻する専門分野を絞り切れず、種々の幅広い分野の講義、演習、実験の単位を修得して卒業していった者や、理学部卒業後、文学部や経済学部へ学士入学した者も少なからずいた。10 年ほど前から隔年に開催されている 1968 年理学部入学者の同期会で彼らと会うと、彼らの方が、研究者としての道を選んだ者たちよりも、理学部卒業生として種々の面で社会に貢献をしているように感じる。この意味で、当時の学部教育制度は誤りではなかったのかもしれない。「課題研究」の入門として、3 回生を対象として「課題演習」が開設されていたが、その履修は、学生の希望が最優先されていた。このような中で、地球物理学教室関係教官が指導を担当する課題演習を選択した約 15 名の学生が「地球物理学教室所属」のような位置付けであった。

地球物理学教室での日々

5 月頃に新 3 回生と教官との懇親会が開かれたような記憶がある。当時の教室の教授陣は、一戸時雄先生、國司秀明先生、山元龍三郎先生、前田坦先生、小澤泉夫先生で構成されていた。何を話したのかは忘却の彼方にあるが、学生の人気を集めていた物理学教室の教員達の「なるべく志望学生を減らそう」としているかのような横柄な態度を知っただけに、どの先生も、何ら偉ぶるところのない「オープンマインド」な態度で学生に対応されることに新鮮な驚きを覚えた記憶がある。

4 回生になると選択した課題研究を担当する講座の研究室内に個人用の居場所（机）が与えられたが、授業、演習、実験に追われているはずの 3 回生には個別の机は与えられていなかった。学生自治会の要求に応じて与えられたのは、地球物理学教室の地下に設けられた薄暗い学生控室であった。古ぼけた大机を真ん中して、隅には使い古しのソファがあった学生控室で、学生自治会活動への教室単位の対応を議論したり、公務員試験対策の勉強会をしたり、お互いの進路についての意見・情報交換などをしていた。大学紛争時の激しい路線対立の余韻はあったものの、総勢約 15 人と少数であったためか、政治的には穏やかな日常であったと記憶している。何かの縁で、研究棟の建

設予定地で、遺跡調査のアルバイトをしたこともあった。

地球物理関係の講義は歴史を感じさせる地球物理学教室建屋3階の小講義室で行われた。手元に当時の資料がないので曖昧だが、3回生前期に開講された地球物理学教室関連の講義は回転系流体力学（鳥羽良明先生）のみであったように思う。その他には、理学部の共通科目として、連続体力学（通年、巽友正先生）、電磁気学（通年、長谷川博一先生）、応用数学、数値解析学などの講義と、それらに関連する演習などの受講が地球物理学専攻を志望する学生には推奨されていた。後期には、地球物理学教室の各講座に関連した講義が開設された。当初は、それらの講義の全てを受講したはずだが、結局、私が最後まで出席したのは、海洋物理学（國司先生）と気象学（山元先生）だけだった。山元先生の講義は用意周到に準備された体系的な内容であった。國司先生の講義では、海洋学研究にかかわる国際的な組織（ICSU、IOC など）の退屈な紹介から始まったことが印象に残っている。海洋物理学には未解明の問題が多々あることを國司先生が講義の中で折に触れて話されていたことが、当時の私の関心を海洋物理学に向かわせた理由の一つだったと思う。

選択した2つの課題演習の一つであった「海洋学および陸水学」では、他の仲間とともに、琵琶湖において、湖岸の水位監視井戸に設置した手製の自記水位計による静振観測、船外機付きボートに乗船してのMBT（機械式バシーサーモグラフ）による水温鉛直断面分布観測、自作したサーミスターチェーンによる内部波観測を分担して行った。いずれも、それまでに経験したことのない新鮮な体験であった。学生控室では、他の課題研究の内容について互いに紹介し合い、仲間の一人の案内で地球物理学教室建屋の地下に設置されていた傾斜計を見学させてもらったこともあった。

4回生になり、私は、課題研究で「海洋学および陸水学」を選択し、海洋物理学研究室での学部学生生活が始まったが、その後も、将来への不安を共有しながら、大学院入試対策、公務員試験対策などで、仲間との日々の交流は続いた。その交流を通じて、地球物理学教室の他講座および防災研究所の多くの教官、技官、事務職員、学生と公私にわたって交流する機会に恵まれた。海洋物理学研究室に所属し、日常で接する事柄の専門性が高まる中、地球物理学教室の家庭的な雰囲気の中で、他の研究室の人々との交流を深めることが出来たのは、今思えば、非常に幸運なことであったと思う。